

子曰く、仁を好みて学を好まざれば、その弊や愚なり。知を好みて学を好まざれば、その弊や蕩なり。信を好みて学を好まざれば、その弊や賊なり。直を好みて学を好まざれば、その弊や絞なり。勇を好みて学を好まざれば、その弊や乱なり。剛を好みて学を好まざれば、その弊や狂なり。

【大体の意味内容】先生はおっしゃった、「仁・知・信・直・勇・剛の六つの美德は、学によつて成就する。仁を好んでも、学問を好まなかったら、自分のふるまいを冷静に観察することができないから、つけこまれて騙されたり、悪逆非道なことにまで利用されたりする、この弊害を愚という。知識ばかり増やして賢者になったつもりになり学問を好まなかったら、くだらないことまで知っていさえすれば偉くなった気になり、人を見下す劣情が止まらなくなる、この弊害を蕩という。信念信仰を固く持つても学問を好まない、己の小信を過信しすぎて、異なった信念信仰を抱く者を傷つけても平気になる、この弊害を賊という。正直に生きてても学問を好まなければ、杓子定規に虚言や取り繕いを厳罰に処して人情の機微を無視することになる、この弊害を絞という。勇猛果敢に生きてても学問を好まなければ、全体の調和を無視して独りよがりな突破力ばかりを行使しようとする、この弊害を乱という。剛くあらうとしても学問を好まなかったら、自分の欠点を反省せず他人を責め立てることばかりに熱中する、この弊害を狂という。」

どんな美德であっても、それだけで絶対の価値があるわけではなく、批判的な吟味にさらされなければなりません。それが学問、つまり学び問うということです。この文章は、孔子が、やくざ出身

の子路しよという弟子に対して、信直しんちく勇剛ゆうこうのような武張ぶった徳目ばかりを無批判に信奉しんぽうする傾向にあるのを戒めこまてゐるくらいではありますが、『老子』の「柔弱じゅうじやく」説を丹念たんねんに読んできた私たち自身も、味わいなおしてみるべきところだと思います。『老子』は直感的に簡潔に論じているので、私のほうで相当の言葉数を補いましたくが、それに比べると孔子のほうがかなり理屈っぽいので、私のほうではあまの言葉数多く補くつ必要がありませんでした。老子の様な直感的天才でなくても、学問研究することことで物事の真理に到達することは可能ですし、またそうやって学問研究しなければ、どんな徳目も軽佻浮薄けいちょうふはくな独断と偏見へんけんによつて捻じ曲ねげられてしまふ危険性があるといつことことです。

『老子』を読んできた後で久しぶりに孔子の『論語』に戻かへつてみると、なんだかやかましい文章だなあという気がします。

人に人格があるように、その表の人格とは異なつたさらに奥深い精神や魂、さらには、祖先たち死者たちの霊界とのかかり方さえも示すような、「霊格れいかく」というモノも、私たちにはあるような気がしています。『史記』という書物を読むと、孔子が、老子に面会してわずかな時間ながら教えを受けた後、老子のことを「あの人は竜のような人だ」と弟子たちに言つたそうです。おそらくこの「霊格」の違いを思い知らされた、というお話なのだろうと思っています。

またこうして素読プリントを作っていると、いろんな人々の書く文章にも「文格」とでもいうべきものが備わっているのを実感します。『老子』は、オリジナルは現存せず、書き伝えられているうちに別人の思想や文章も混入しているといわれていますが、確かにそうと感かんじます。『老子』の「文格」が強かく感じられるものと、「これは怪あやしいな、わからないな」と感じられるものもあります。

『老子』の素読プリントは7のまで作りましたが、まだあと7〜8冊まであります。しかしこの最後のクライマックスのはずの諸章が、読んでいて眠ねくなります。きちんとした根拠はありませんが、『老子』の「文格」が原形をとどめないほど壊これていると感じましたので、もうやめました。これこそ「独断と偏見」に過ぎないですが…

今後は『論語』や、その他さまざまな古典の文章を使って素読プリントを作っていきます。

もしリクエストがあれば遠慮えんりょなく言いつてください。検討します。